

# 1980年代における戦後地方文化運動に関する研究 —「ふだん記」北九州グループ、あいちグループを対象として—

川原健太郎

キーワード：社会教育史、メディア、文化運動、書く実践、「ふだん記」

**【要 旨】** 本稿は東京西部・八王子の実践家である橋本義夫（1902-1985年）が1960年代後半に八王子で創始した書く実践「ふだん記（ふだんぎ）」の理念に共鳴し、1980年代に活動を始めた「ふだん記」各地グループを対象にした研究である。この「ふだん記」は書き手の自分史など、自由に文章を綴り、読み合う実践である。

日本ではさまざまな場所において、各種の文化運動が展開されてきたが、戦後70年を経過した中、戦後日本における地方の文化運動がどのようなあゆみをたどってきたのかは、日本の戦後教育史をみる上でも、重要なことと思われる。一方で、戦後の期間も70年に亘っており、戦後の文化運動には今回対象とする文章を書く実践以外にも、青年団や女性の学習活動など多様な実践が該当するため、全ての掘り起こしは容易ならざることであることも予想される。

そこで本研究では庶民の文章運動「ふだん記」を対象にし、中でも創始された地である八王子から離れた各地で行っている「ふだん記」各地グループに焦点化した。特に、1980年代以降に創始された北九州グループおよびあいちグループを対象としたい。「ふだん記」北九州グループおよびあいちグループを対象に、その実践を描出しつつ、意義を明らかにすることを目的とした。

本研究では1. 「ふだん記」各地グループの概要、2. 「ふだん記」北九州グループ、3. 「ふだん記」あいちグループ、4. 各地グループの意義を論じた。本稿で論じた各地グループには、1960年代後半に創始された「ふだん記」の理念に共鳴しながら、1980年代以降において、それぞれの地で人々の生を綴る場の一つとなってきた意義をみいだすことができた。

## はじめに

本稿は東京西部・八王子の実践家である橋本義夫（1902-1985年）が1960年代後半に八王子で創始した書く実践「ふだん記（ふだんぎ）」の理念に共鳴し、1980年代に活動を始めた「ふだん記」各地グループを対象にした研究である。「ふだん記」とは書き手の自分史など、自由に文章を綴り、読み合う実践である。

日本ではさまざまな場所において、各種の文化運動が展開されてきた。戦後70年を経過した中、日本の各地方においてどのような文化運動が展開されてきたのかをみることは、日本の戦後教育史をみる上でも、重要なことと思われる。中でも今回対象とする文章を書く実践以外にも戦後の文化運動には、青年団や女性の学習活動など多様な実践が該当するため、一つひとつを丹念に掘り起こしていくことも重要であるように推察される。

そこで本研究では庶民の文章運動「ふだん記」を対象にし、中でも創始された地である八王子

から離れた各地で行っている「ふだん記」各地グループに焦点化する。特に、1980年代以降に創始された北九州グループおよびあいちグループを対象とする。本稿ではこの「ふだん記」北九州グループおよびあいちグループを対象に、その実践を描出しつつ、意義を明らかにすることを目的とした。

ここで1980年代以降の「ふだん記」各地グループに着目した理由は、1950年代の生活記録運動が隆盛した以降の書く実践の取り組みをみたいと考えたためである。戦後の書く実践において最も知られ、全国に広がったこの運動は戦後の書く実践として最も影響の大きい運動の一つであった<sup>1</sup>。文章を書く実践は、そこから時期に応じた人々の思いなどもみることが可能であり、重要な実践と思われる。一方で生活記録運動以後の書く実践を対象とした研究は生活記録運動に比べ、必ずしも多くないように見える。そこで、1980年代以降に取り組まれている書く実践をとりあげたのである。

なお、今回取り上げる「ふだん記」北九州グループやあいちグループは1980年代以降の実践であるが、「ふだん記」運動そのものは1960年代後半に東京西部・八王子で始まり現在もなお続いているなど、50年に亘る実践である。しかしながら活動期間の長さを鑑みると、未解明の部分も少なくない実践ともいえ、「ふだん記」各地グループの内容に迫ることは書く実践に関する研究対象を広げうる可能性も帯びていると思われることから、各地グループに着目した。

なお、各地グループは1976年1月に発会した八菅グループ（神奈川県）から始まり、現在は北海道から九州までの全国各地で活動が行われている。2018年1月においては約20のグループがある。各地グループは、橋本義夫が提唱していた「その土地よかれ その人よかれ」や「独立するが孤立せず」を標榜し、各グループ間で文章の投稿や交流会等の出席などでゆるやかにつながりつつも、各グループは独立してそれぞれの活動が行われてきた。

本研究において対象とする北九州グループ（機関誌〈ふだんぎ北九州〉1980年2月創刊）およびあいちグループ（機関誌〈あいちふだんぎ〉1980年2月創刊）は、いずれのグループも「ふだん記」が誕生した東京西部三多摩地域の八王子からは地理的に離れているグループであり、なおかつ共に機関誌の創刊年が1980年代である。さらに現在まで活動が継続して行われてきた点も共通していることから対象に取り上げた。

本研究では主に、二つのデータにより研究を行った。研究対象の第一は、北九州グループ及びあいちグループの文友（「ふだん記」の執筆者）に対するインタビュー調査（個人及びグループ対象）、第二は北九州及びあいちグループの機関誌のバックナンバーである。以下、本研究では1. 「ふだん記」各地グループの概要、2. 北九州グループ、3. あいちグループ、4. 各地グループの意義の順に論じる。

## 1. 「ふだん記」各地グループの概要

### (1) 先行研究

本項では関連する先行研究を概観しつつ「ふだん記」各地グループの概要を論じたい。

戦後日本においてはこれまで、さまざまな地方や地域に着目をした取り組みが進められてきた。例えば近年の政府レベルにおける取り組みをみても、1980年代後半のふるさと創生事業、

2000年代に入ってから構造改革特区、今現在取り組みが進められつつある地方創世など、地方それぞれの良さを活かしながら地域の活性化などを目指そうとする試みをみることができる<sup>2</sup>。

しかしながら、こうした各地域における文化運動は、政府・政策レベルで行われてきたものではなく、市井に暮らしてきた人々の営みによりすすめられてきたものと思われる。戦後の書く実践に限定しても、生活記録運動、その後の自分史学習など、多数の実践が行われてきた。例えば、近年の社会教育分野における生活記録運動や共同学習の研究に関してみても、辻智子や猿山隆子らによる研究など豊富な蓄積があり<sup>3</sup>、自分史と社会教育に関しては、添田祥史の研究などをみることができる<sup>4</sup>。

前述したうち、例えば1950年代を中心に隆盛した生活記録運動は、女性や青年たちにより担われた文化運動として、日本の様々な地域においてさまざまな実践が展開されており、数多くの草の根の民衆の記録が紡がれてきた<sup>5</sup>。

さらに、生活記録運動の後に盛んになった書く実践として挙げられる自分史は、書き手が自らの歩んできた来歴を書き記す実践であるが、その綴られた歩みは人々がそれぞれ生きて来たことの記録であると同時に、庶民により作られてきた文化の記録でもある。例えば、自分史研究家の吉沢輝夫は、自分史をその芽生えからその後の展開を体系的に研究しつつ、「自分史文化論」として捉えようとする試みを行っており、自分史という文化に関する研究もみることができる<sup>6</sup>。

本研究の研究対象である「ふだん記」もこれらの流れをくむ書く実践である。前述のように、「ふだん記」は八王子の橋本義夫が1968年に創始し現在まで続いている、人々がふだん着のように飾らない文章を自由に書く運動であるが、書かれる内容の中心の一つは自らの来歴、すなわち自分史である。「ふだん記」は自分史の提唱者である色川大吉が、自分史の着想を「ふだん記」から得たとしているように、自分史運動のルーツともいえる実践であり、50年近い活動の実績がある。こうしたことから「ふだん記」や創始者の橋本義夫を対象にした先行研究には一定の蓄積がみられ、ライフストーリーとの関わりから論じた社会学における研究、橋本の生涯に焦点をあてた文化人類学における研究、現代史の視角からとらえた研究などさまざまなみることができる<sup>7</sup>。これらの研究を通して、「ふだん記」の成り立ちや理念、意義などが明らかにされてきた。

しかしながら、「ふだん記」研究においてはこれからの研究を待つ箇所も少なからずあるように思われる。その一つが「ふだん記」各地グループである。例えばこれまでの「ふだん記」研究の対象は、1968年から10年に亘って展開されてきた「ふだん記」の活動初期や創始者の橋本義夫が中心のテーマとして取り扱われることが多く、「ふだん記」が全国的に広がりをもせた各地グループに関する研究は、あまりみられなかった点に課題があるように思われる。

## (2) 「ふだん記」各地グループの概要

次に、「ふだん記」各地グループの概要に関して述べる。各地グループはその名前が示す通り、全国各地において「ふだん記」を実践するグループであり、最初に発会したのは、1976年1月24日の八菅グループ（神奈川県）である<sup>8</sup>。その後もさまざまなグループの結成や解散があり、2016年6月には北海道（現在道内には6グループ）から九州まで約20のグループが存在している<sup>9</sup>。

各地グループの基本的なあり方については、創始者橋本義夫の言葉からひも解きたい。

『その土地よかれ、その人よかれ』が前々からの『ふだん記』の方針である。庶民自身の文化だから、中央集権をさげ、地方分権的にならねばならない。殊に、先進国がなくなった今日では、地方地方が独立的に地方色をだし、獨創性を生む基地にしたい。先進国は、地方が各々に先進的な歩みをするものである。この意味でも各地にそれぞれ『ふだん記○○(地名)グループ』が生れねばならない<sup>10</sup>。

ここから浮かび上がる鍵概念が「その土地よかれ、その人よかれ」である。中央集権ではなくそれぞれの地方が重んじられつつ、庶民文化を形作っていく「ふだん記」の考え方が示されている。ここでは「先進国がなくなった」という表現で時代背景を念頭に置きながら論じているが、高度経済成長期を過ぎ、ジョン・K.ガブルレイス『不確実性の時代』のベストセラーなど、先行きが見えづらくなっている中、新たな文化のあり方を模索していた時代とも重なりあうように思われる。

さらに橋本は各地グループのあり方に関しても、次のように続けている。「各地グループは、独立的であるが、孤立はさげなければ生長しない。(……)然も本当の『その土地よかれ、その人よかれ』にするには、各地に『ふだん記グループ』をつくり、その地のセンターとなり、全国で相互扶助をしなければ効果的ではない。(……)全国各地のどんなところにも、その土地の『ふだんぎ』を発行し、それが土地の印刷所にも、公共施設ともつながり、『みんなの本』として機能を発揮し、『みんなの文化』として花を咲かせ伝統にして残したいものである<sup>11</sup>。

もう一つの鍵概念が、ここで述べられている「独立するが孤立しない」である。それぞれが尊重されつつも孤立してしまうことのないように支える「ふだん記」のあり方である。「ふだん記」の各地グループが発行しているそれぞれの機関誌への他グループの文友による投稿、印刷費等の喜捨や他グループの交流会への参加も多く、グループごとの活動だけではなく相互に関わりを持っている現状からも、こうした指針を伺うことができる。加えて、上記引用文では、橋本が各地で庶民の出版文化が広がり「みんなの文化」として定着を願う気持ちも示されているが、これは「ふだん記」の活動の伸展における各地グループへのこれからの期待を持っていたように読み取れる。

「ふだん記」の各地グループには、窓口と呼ばれる文友（「ふだん記」の執筆者）がいる。窓口とは文字通りグループの窓口であり、文友への連絡調整や会誌の発行や会合の準備等運営の中心となる人物である。「ふだん記」のグループによる活動に関する橋本の説明をみると、以下のよう記されている。

『ふだん記』グループは、手紙の交流に始まり、機関誌『ふだんぎ』で各人が文章を発表し、個人文集を刊行する。それによって『文友』は、文字通り友人となっている。そこで年一回の会合は『逢う日話す日』と名付け、大会を兼ねて催す。この大会は会名の通り、『逢う日話す日』を目的として、普通の会のような形式をさけている。何よりもみんなが発言し、交流し、肩を叩き合う。新人も旧人もない。上も下もない。初めて来た人でもいつのまにかグループの一員のようになり、一緒に楽しむ<sup>12</sup>。

手紙の交流、機関誌の発行と各人の文章の発行、文章をまとめた個人文集（自分史をまとめたふだん記本）、さらに会合である「逢う日話す日」の開催などの活動が行われている。これらを

みると、「ふだん記」の活動は文章を書き発表することだけでなく、手紙のやり取りや直接の会合など、文友相互のやり取りにも重きを置かれていることが伺える。会誌発行や手紙のやり取りを軸にしながら、各地グループは各自で実践する形式となっていたようである。

各地グループのあり方に関しては色川大吉も次のように言及する。「このグループを、『一人のリーダーの下で、精神的なきずなで結ばれた運動体』と位置づける人もいますが、内側をみるとそうでもありません。各地ごとにたくさんの立派な地域のリーダーがいるのです。橋本さんが亡くなって、それでも『ふだん記』も終わりだろう、と言った人もいたのですが、その後も『ふだん記』は全国二七カ所で、各地ふだん記として、それぞれ自立的に継続され、北海道などでは会員が倍増したりしています<sup>13</sup>」。創始者橋本も「ふだん記」を中央集権的でなくとしていたが、色川の指摘にも「ふだん記」の各地ごとの地域のリーダーの存在が言及されている。こうした各地グループにおける活動がどのようになされてきたか、次項から論じていきたい。

## 2. 北九州グループ

### (1) 北九州グループの概要及び調査概要

ふだん記北九州グループの誕生は1980年1月、1980年2月に機関誌〈ふだんぎ北九州〉の創刊号が出版された。窓口は創設当時から現在まで務めている川原洋子氏である。窓口は福岡県北九州市に置かれている。北九州グループとして執筆している文友の地域は福岡県を中心に九州から、中国・四国などに広がる。現在「ふだん記」各地グループの中では最も西に活動しているグループである。〈ふだんぎ北九州〉は2017年9月時点で39号まで発行されている。発行の間隔は約年1回、号によって発行月は若干の変動があるが、現在はおおよそ7月から8月頃が発行の目安となっている。なお機関誌の発行部数は250部、北九州グループの文友数はおおよそ24、25名から30名弱程度のものである<sup>14</sup>。主な活動は、機関誌の発行及び発行に係る編集・校正作業、機関誌の発送作業、さらには文友の交流会の開催などがある。

機関誌である〈ふだんぎ北九州〉の体裁は、1号（1980年2月）から5号（1983年4月）までは手書き・B5版（内1-2号は手作り、3号（1981年7月）以降は印刷会社での印刷製本）、6号（1984年12月）以降は活字・A5版になり現在までこの形での発行になっている<sup>15</sup>。〈ふだんぎ北九州〉誌では、橋本義夫による巻頭言や文友の写真の他、北九州グループによる投稿と、他の各地グループ文友による投稿を柱立てを中心に構成されている。さらに、本誌の特徴にみることで「おたより集」と題された北九州グループ宛に届いた全国の「ふだん記」文友からの手紙の抜粋記事である。「おたより集」では前号に対する感想、つどいへの参加の感想や近況報告などが掲載されており、文友同士による直接の手紙の交流のみならず機関誌の誌上でも文友の近況などが伝え合える場になっていることから、機関誌は各自が執筆した「ふだん記」の文章の発表の場であると同時に誌上交流の場となっていることが伺える<sup>16</sup>。

なお、会の設立理念や活動状況、さらに執筆する文友の「ふだん記」との出会いや「ふだん記」への思い等を描出するにあたり、北九州グループ文友へのインタビュー調査を行った。インタビューは全3回、調査1及び調査3はグループインタビュー、調査2は窓口への個人インタビューの形式で実施した。概要は以下のとおりである。

### 【インタビュー調査1】

2015年9月4日ふだん記北九州グループ・グループインタビュー（於：北九州市「小幸」）

（倉田栄子氏、田村貴美子氏、（川原洋子氏、山本久江氏立ち会い）、聞き手：川原健太郎）。

### 【インタビュー調査2】

2015年9月5日ふだん記北九州グループ窓口・川原洋子氏ライフストーリー・インタビュー

（於：北九州市、川原洋子氏宅）、聞き手：川原健太郎。

### 【インタビュー調査3】

2015年9月5日ふだん記北九州グループ・グループインタビュー（於：北九州市「湖月堂」）

（相原百里江氏、石橋英子氏、牛島和子氏、川原洋子氏、（川原士道氏、川原奈津子氏立ち会い）、聞き手：川原健太郎）。

なお、インタビューでは被調査者の自分史（「ふだん記」に出会うまでの人生とその後）、「ふだん記」参加の契機や執筆における思いなどを問いつつ、その他の「ふだん記」に関する事柄を自由に語ってもらう半構造化インタビューの形式で実施した。調査2の窓口へのインタビューでは窓口の方にライフストーリーを語りつつ、そこに「ふだん記」を位置づける形式で「ふだん記」への思いを語ってもらい、調査1および調査3では文友複数人に対するグループインタビューの形式を取り、各自に来歴や「ふだん記」との出会いに加え、グループで「ふだん記」への思いを語ってもらう形式をとっている。

## (2) 北九州グループの創設とあゆみ

北九州グループの創設は1980年1月であるが、その前史には創立者たちと「ふだん記」との出会いがある。ここでは創立者3名のうちの1人で創立当初から現在まで窓口を務める川原洋子氏と「ふだん記」との出会いから北九州グループのあゆみを論じる。中でも川原洋子氏の語りや自身の自分史を記した著書であるふだん記本などを参照しながらグループの創設時の理念をみることで、窓口の視点から北九州グループの一側面をとらえたい<sup>17</sup>。

「ふだん記」と北九州グループ窓口・川原洋子氏のつながりは、私立高校の教師として教鞭をとっていた川原氏が、自分史の視点での現代史の叙述を試みつつ橋本義夫や「ふだん記」に関して論じた書である色川大吉『ある昭和史』（中央公論社、1975年）を読み、1977年4月に橋本へ手紙を出したことが契機であった<sup>18</sup>。当時学校の必修クラブで文芸部を担当しており、「これでやろう、これならやれるね<sup>19</sup>」と「ふだん記」の関わりを持った川原氏は『ある昭和史』の橋本義夫を論じた章である「ある常民の足跡」に触れながら次のように語る。

「常民という言葉もひかれたというか、何だろうということ、その章を読んだということですね。そうしたら、『ふだん記』のことを書いてあったんですけど、（……）海端さんの人生の一端、それと詩が書いてあって。（……）それで、すごいなっていうか。読んだらパッと流して忘れられるものじゃなかったんですね。残ったというんですかね、私の中に<sup>20</sup>」。

川原氏は『ある昭和史』で綴られる、「常民」・創始者の橋本義夫の他人の為に働く生き様や、長崎・五島に暮らし「ふだん記」の中で詩などを発表している文友、海端氏の印象が残ったとい

い、「ふだん記」への関心を深めたと語っている。

こうした出会いのあと、川原氏は「ふだん記」の文友や橋本へ手紙を出し、の交流が始まる。この時期、1977年4月から12月までの橋本義夫や他の文友との手紙や本の送付などのやり取りを重ねた記録も残されている<sup>21</sup>。当時の手紙での交流内容は、次のように語られている。「自分の自己紹介から始まりますよね。こういう者ですか。(……)例えば作品を読むとかいうことじゃなくて、その人の生活に触れるという感じですよ。だから、作品を読んでその感想というんじゃないで、その方の生活だとか、その方の趣味とか、好きなこととか、今どうしているとかいう、そのことに関する応答という感じですかね。だから書けたんじゃないですかね。(……)はがきのやり取りということはその方の生活とか、本当に話を聞いているような感じで、じかに会ってないけども、じかに触れている感じではがきを書けたのじゃないでしょうかね<sup>22</sup>」。北九州グループ立ち上げ前に行っていた時期の「ふだん記」文友との交流は、執筆した作品を介したものというよりも、日常的な会話に近い応答などのやり取りが中心であったようだ。こうしたことから執筆・出版などを行う各地グループの活動を始める前に、文友とのつながりによる関係づくりがあり、各地グループの活動を開始できる土壌が醸成されていたことが伺える。

北九州グループは、そこからおよそ3年弱後の1980年1月、川原洋子氏、倉田栄子氏、藤田裕子氏の文友3名で立ち上げられた。〈ふだんぎ北九州〉の創刊は1980年2月、橋本義夫が巻頭言「下手に書いて 粗末に出す」を寄せ、次のような一節を綴っている。「学校で、文字その他が読めれば、辞書、図書、講演、放送、新聞、一切が手にでき、一生喜んで勉強できる。今時、万人の文章、万人の本などは自由自在である。(……)『下手に書きなさい』が世を動かしたように、『うすく、小さく始めなさい』が全国に『ふだんぎ』を生むことであろう。北九州によって、一九八〇年の光が、ひろがるのである<sup>23</sup>」。小さくともまず始めることの重要性への意識が各地グループ誕生の背景にあったことをみることができる。こうした橋本による巻頭言もあり、川原氏は「『創刊号は無理しても、今後は無理せぬこと』という言葉に安心して、何とか自分たちの手で、うすい機関誌を出していこうという気持ちが固まりました<sup>24</sup>」と創刊時の気持ちを振り返りながら機関誌に綴っている。

「下手に書きなさい」を掲げ、下手であることを恐れずまずは文を書いてみようとする、形に残すことを重視することが「ふだん記」運動を示す性質の一つであるが、各地グループの立ち上げにあたって、薄い本でも小さい本でもとにかく作ってみようという視点で作られており、「ふだん記」の文章執筆における理念である「下手に書きなさい」と同じ意識が根底にあることを伺うことができる。こうした「ふだん記」運動のもつ、下手を恐れず少しでも書いてみようとする考え方への共感、川原氏とともに北九州グループを立ち上げたメンバーの一人である倉田栄子氏からの記録からも読み取れる。

看護師であった倉田氏は、仕事での必要もあり文章執筆の指南書を探していた時に、橋本義夫による文章執筆の書である『だれもが書ける文章』（講談社、1978年）と出会ったのが「ふだん記」と関わるきっかけだという。〈ふだんぎ北九州〉創刊号では「『下手でもよいのだ、書き始めねば』と、ほそほそながら、全国の方々にハガキを書いていった。ハガキというのは、私のよう

な文を書くことが苦手なもので、何とか書ける。(……) ふだんぎは、こんな風におずおずと書き始めた者を、暖かく受け入れてくれる<sup>25)</sup>と綴り、「ふだん記」への入りやすさに言及している。

川原氏が北九州グループを立ち上げる契機に関してもこうしたことが伺える。「スッと受け入れられるというか、安心して、別に頑張ろうとかじゃなくて、これでできるのかとか、そんな感じでしたから。多分、北九州も(……) 私たちもできるねという気持ちになって、そしてやろうかということになったのだと思います<sup>26)</sup>」。北九州グループ立ち上げ時の記録や語りから伺えるのは、「ふだん記」への参加、書くことやグループの立ち上げなどに通底する、易行の考え方への共感である。難しく大きいものを作ろうとせず、まずは小さいものからでも活動をはじめようとする易行の考え方が、北九州グループの設立から現在にまで影響を及ぼしていることが推察できる。北九州グループは創立したメンバーが現在まで運営の中心として関わり、創立当初から易行に書くという思いを継続しながら運営してきたグループである。繋がりたい、関わりたいとする思いを受け入れながら、文章は易しく書けるという土壌を作ってきたグループの姿を見出すことができる。

### (3) 文友の語りからみた北九州グループの役割

続いて、文友の側面から北九州グループが果たしてきた役割を論じたい。なお、文友とは「ふだん記」で執筆をする「ふだん記」の仲間のことである。「ふだん記」はそれぞれが自由に文章を書く運動であるが、参加の経緯は文友ごとに異なる。ここでは、こうしたことを踏まえ、「ふだん記」に集う人々がどのような経緯で「ふだん記」に集い、「ふだん記」での実践から何を得ているのか、インタビューによる語りと執筆の記録をたどって、北九州グループを述べる。

なお、インタビューの概要は既に(1)で示したとおりであるが、ここでは文友の語りを(1)「ふだん記」参加の契機、(2)「ふだん記」から得たこと、(3)北九州グループに関する語りの分類でまとめつつキーワードを抽出し、集約化する方法で分析を行った。

表1 北九州グループの語りにもみる「ふだん記」参加の契機

インタビューでの語り	キーワード	出典
(1)_1 「読書会ってって、いろんな本を読みながらお互いに、この本いいよねとかいろいろ言って、(……) それの中の一人の人がふだん記に関わってたんですね。それで、その本を見てみないって言われて読んで、すごい、何ていうんですかね、いろんな人たちがいろんなことを自分の言葉で書いてるんですよ。これいいなと思って、即入るといふうに。(田村氏)(1990年頃当時の振り返り)	読書会 紹介 自分の言葉で書く	調査1
(1)_2 「朝日新聞に手紙ごっここの会とかいう紹介があったんですね。何でもピンときたらすぐにアクセスするものですから、それで問い合わせたら手紙ごっここの会に入られて、そしてその中の1人からこういうふだん記というのがあるよと教えてもらったんですよ。(牛島氏)(1985年頃当時の振り返り)	手紙ごっここの会 紹介	調査3
(1)_3 「『下手に書きなさい』(橋本義夫、四宮さつき『下手に書きなさいふだん記のすすめ』太揚社、1984年)というこの本に出会ったんです、本屋さんで。その後に川原先生が新聞に投書されていたんですね、ふだん記のことについてそれで、(……) お手紙を最初出したんですよ、こちらが。」(石橋氏)(1985年頃当時の振り返り)	本との出会い お手紙	調査3

表1に示したのは、「ふだん記」参加した経緯に関する語りである。創設した文友からは本に「ふだん記」が紹介されていたことが契機と語られていたが、ここではそれ以外の経緯が語られていることが伺える。特に、読書会（(1)\_1）や手紙ごっこの会（(1)\_2）という他の人から紹介を受けて、手紙を出していたことがきっかけとなっている語りを見ることができる。

例えば、上記（1）\_2を語る文友の一人牛島氏は、「ふだん記」と関わりを持ち始めた当初の1986年頃を〈ふだんぎ北九州〉においても綴っている。（窓口の川原氏宛に出した手紙の）「返事はすぐ来た。私の不安をかき消すかのように『ハガキがかければ誰でも文章は書けますよ』と言ううれしい言葉だった<sup>27</sup>」。さらに、その後の例会への参加に関しても、「『書くことが好き』という共通項で結ばれた皆さんの輪の中に、何の違和感もなく入っていくことが出来た自分に我ながら驚いている<sup>28</sup>」と書いている。

ここで取り上げたこれらのことを語る3名の文友は、友人の紹介や本との出会いなどが直接的なきっかけであることを語っていた。一方でいずれにおいても読むこと・書くことに関心を持っていたことに共通項が見いだせる。こうしたことから北九州グループは、書く実践に興味を持った文友が地元で参加できる場としての役割を果たしていたことを伺うことができる。

表2 北九州グループの語りにも「ふだん記」から得たこと

インタビューでの語り	キーワード	出典
(2)_1 「私たちにしてみたら友達ができた、心の底から話し合えるんですよね。友達ができたというのが、私、本当に良かったなと思っています（……）落ち込むようなことがあってもふだん記という、何かこうあるんですね。心のつながりがあって、そんなことで救われるというんですかね」。(田村氏) (2)_2 「いろんな人たちのいろんな生き方が全部文の中にあるでしょう。こんなこともあるのかとか、私よりもっといろんな苦勞をしている人たちもいるんだとか、いろんなことを文章の中から読み取れるんですよね。だから、すごいそれが自分のためになっている」(田村氏)	友達 つながり 他の生き方	調査1
(2)_3 「主人が特殊な事故で亡くなりましたので。炭鉱の事故なんです。だから、昭和38年の5月の7日ですけど、いまだに海底に埋もれたまままで、上がってきていませんから（……）その事故の前後のことをこれに全部書かせてもらって。だから、ふだん記があったからこういう記録が私も残せたんだと思いますしね。先生がいつも記録というのは人間だけに与えられた特権であるってよく言われましたけど、まさにそうだろうと思いますね。私にでも本が書かせていただけたというのが本当にふだん記に入って一番大きな、それが宝です。」(相原氏)	記録を残す	調査3
(2)_4 「自分が読みたい人のことを読んで、そしてそこから、わあ、こんなこと、こんなやっただんと思うから私は励まされるというか、静かな声で励まされるというか」(川原氏)	他の人のこと 励まし	調査1
(2)_5 「書くことを結構するようにはなりましたよね」(倉田氏)	書くこと	調査1
(2)_6 「交友関係が一部ではありますがも広がったというのが非常に楽しいですね。」(牛島氏)	交友関係	調査3
(2)_7 「いろんな人と出会い。それはまたよその県の方だったり、北九州市内の人であったりもそうなんですけれども、やっぱり出会いがすごいいいなと思うんですよ。」(石橋氏)	出会い	調査3

次にみるのは、「ふだん記」から得られたことに関する語りである。キーワードを見ると、二つに大別することができる。第一は記録を残すことや他の人の記録を知るといふ、書くこと／書

かれたものに関わる語りであり、第二は友人や出会いなどの交友関係に関するものである。

第一の書くことにおいては、自身が書くことのみならず他の文友の「ふだん記」を読むことで、色々な生き方を知ることができる点と語られている点は特に目を引く点である。川原氏が(2)\_4で「励まされる」として例に挙げていたのが、鹿児島県の文友・志風忠義氏の存在である。志風氏は進行性筋ジストロフィーを患いながら、「生を受けている幸せをかみしめつつ、できることは知れていても、自分の可能性の限りを尽くして『やってみる』心を養うことは生きる力となるのです<sup>29</sup>」と綴るなど、「ふだん記」に精力的に執筆をしていた文友の一人であるが、他者の綴る文章を読むことが読み手の力となっている点に、「ふだん記」の文章の持つ力を見出すことができる。こうした言及は、田村氏の(2)\_2の語りで見ることができる。

第二にみえる交友関係に関しては、(2)\_1, 6, 7でそれぞれさまざまな形で表現されている。心のつながりや出会いという形で紹介されているが、書くこと、特にハガキや手紙を書くことでつながる関係があることを伺える。上記で取り上げた文友の一人、石橋氏はハガキのやり取りに関する気持ちを〈ふだん記北九州〉への初投稿で「あなたのおハガキ毎日心待ちにしておりました故、ポストに見つけた時は大変嬉しく思いました<sup>30</sup>」と、「ふだん記」での経験を書き綴っている。

さらに、書き残すことの意味を語るのは相原百里江氏の(2)\_3の語りである。相原氏は、自身の配偶者を炭坑の事故(1963年5月、山口県小野田市 大浜炭鉱出水事故)で亡くしているが、その記録を自分史の「ふだん記」本にまとめている(相原百里江(橋本義夫編)『白いノート』ふだん記新書64、ふだん記全国グループ、ふだん記広島グループ、1980年再販(初版1979年))。本書は創始者橋本義夫をはじめとする「ふだん記」文友による尽力でできたといい、「(橋本)先生から渡されたときには、本当もう、感動っていう、そんなもんじゃなかったですね<sup>31</sup>」と語る。同書では事故の記録と心の動きが克明に綴られている。このようなふだん記本は自分史の記録であると同時に、その時代を生きる人々を通じた地域の記録としての意義をみいだすことができる。

表3 北九州グループに関する語り

インタビューでの語り	キーワード	出典
(3)_1 「言われるのは、北九州ふだん記は、本はものすごく本当にふだん着だって(……)本当にトイレに持って行ってそこで読めるような、ちょっと本当に電車に乗ってパッと広げて読めるというのはすごいとつきやすい本でいいよって、大体の人が言ってくれます」。(田村氏)	ふだん着	調査1
(3)_2 「これ以上厚くせんでねって(……)ちょっと後から読もうとかなんとかなるから。これ以上厚くせんでねって言うんですよ」。(川原氏)	厚くせんで	調査1
(3)_3 「北九州はやっぱり川原さんの力が大きい。(……)やっぱり窓口さんの力がどこでも、全国のどこでも大きいですよ」。(倉田氏)	窓口さんの力	調査1
(3)_4 「グループを作るということはみんなの書いたものを出す、(……)だから自分の記録を残す、そして発表機関も持つというのが。持たないで自分だけで書いていたら消えていったりするから、(橋本)先生は大事なのは発表機関を持つことだということだから各地グループでということ、(……)グループ作ったら当然文集を出してということ」。(川原氏)	発表機関を持つ	調査3

<p>(3)_5 (北九州で「ふだん記」を書くこと)「自分では意識しませんよね。自分の所でやっているから。でも、逢う日に行くと、遠くから来てくれたねとか、九州から来てくれたからっていうことを言って、乾杯はあなた一言言って乾杯の音頭を下さいとか、九州から来たということで、非常に遠くから来たということですからごく温かく迎えていただいているわけです。(……)逆に私は自分が行けない所、例えば北海道とか、青森、東北でいったらあこがれたりしたりしますでしょう。それと同じで、九州にはまだ行ったことないけど行きたかったんですよとか、九州に対する、行ったことのない土地に対する関心というもお持ちの方は九州から来たと言うと、九州からね、一度は行ってみたいのよって」。 (川原氏)</p>	<p>自分で意識しない</p>	<p>調査2</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------	------------

最後にみるのは、北九州グループに対する語りである。北九州の地で「ふだん記」を書くことに関する聞き手の問いかけには、(3)\_5にみられるように普段意識することはないと語られている。自分たちが北九州の「ふだん記」の担い手として意識しながら実践に取り組むということではなく、むしろ「ふだん記」運動において書くことと並んで重視されている、他の文友との交友の中で結果的に気づくことがあると語られているようである。これらを鑑みると、普段の活動の中では自分史や日常などの内容をありのままに記すことが中心であり、九州という地元への特段の意識があることは伺えなかった。

一方で、(3)\_4のように各地グループとして発表機関があることの意味に言及している語りを見ることができた。〈ふだんぎ北九州〉誌には、自分史以外にも地元・九州で生活している暮らしのこと、郷土の歴史などに関する「ふだん記」の記録が収められてきている。自らが暮らす地元で自分の記録を残し、共有することで残すことを可能にする機関があることで、それぞれの地域に記録を残す場の役割を各地グループが果たしていることが伺える。

例えば、機関誌の〈ふだんぎ北九州〉の目次から九州を中心とした地元を記した北九州グループ文友の作品をみると、藤田裕子「博多にわか(一)」(創刊号、1980年2月)、山本久江「九州ってところは」(5号、1983年4月)など、地元を紹介するような文章が見受けられる<sup>32</sup>。一方で北九州グループ以外の文友からの投稿に九州のことを綴る作品がみられる(錦田文子「九州についての思い出」(9号、1988年3月)、大貫いと「思い出の九州路」(18号、1996年7月)など)。九州で発行されている機関誌である〈ふだんぎ北九州〉ということを読みながら、他グループの投稿者も折々で九州に関することを綴っている。いわば、本の発行地の地域を論じる交流をする材料となっていたことが推察される。

さらに、北九州グループを語る中で特に話されていることが(3)-1や(3)-3にみえる、窓口さんの力という語りである。3名で創立した北九州グループは当時のメンバー2名が継続して会を続けており、創立当初より気を張らずに続けるという思いを大切にしながら語り合いの場を継続させてきたグループであるととらえることができる。

### 3. あいちグループ

#### (1) あいちグループの概要及び調査の概要

ふだん記あいちグループは、1980年2月に機関誌〈あいちふだんぎ〉の創刊号が出版された。現在の窓口は堀昌逸氏(56号、2007年6月より現在まで)、窓口は岐阜県羽島郡笠松町に置かれ

ており、活動は主に名古屋の周辺で行われている。あいちグループは愛知県、岐阜県等の東海地域を中心とした各地グループである。

〈あいちふだんぎ〉は2017年6月までに76号が発行されている。発行の間隔はおおよそ年2回、現在は6月と11月の発行となっている。なお機関誌の現在の発行部数は130部、文友数は投稿者数ベースで46名である<sup>33</sup>。主な活動は、機関誌〈あいちふだんぎ〉の発行及び発行に係る編集・校正作業（編集会、校正会）、機関誌の発送作業、さらには交流会（例会、出版会等）の開催を行っている。機関誌〈あいちふだんぎ〉は創刊（1980年2月）から5号（奥付なし、橋本義夫記念資料庫に収蔵されている冊子には1982年12月到着のメモ書きあり）まではガリ版のB5版、6号（1982年6月）からはタイプ打ちの活字A5版の本となり、現在も活字A5版の体裁で発行されている。〈あいちふだんぎ〉の構成は文友の写真、橋本義夫の巻頭言、あいちグループ文友による投稿文、各地グループ文友による投稿文が主になっている。書かれている内容は自分史の他、日常生活で感じていることや活動の記録、掲載された文章に対する感想、他の文友へのメッセージなどである。さらに10号、20号、などの節目の号では記念号を発行しており、記念号では文友から「ふだん記」そのものやグループに寄せた文章の特集が組まれている。

ここでは、ふだん記あいちグループの活動をみるために二つのインタビュー調査を実施した。インタビュー調査4は個人へのライフストーリー・インタビュー、インタビュー調査5では、グループインタビューの形式で行った。両インタビュー調査の概要を以下に示す。

#### 【インタビュー調査4】

2015年12月4日「ふだん記」あいちグループ窓口・堀昌逸氏ライフストーリー・インタビュー（於：笠松町、堀昌逸氏宅）、聞き手：川原健太郎。

#### 【インタビュー調査5】

2015年12月4日「ふだん記」あいちグループ・グループインタビュー（於：熱田図書館）

（石川多壽子氏、賀治美知子氏、加藤慶子氏、新矢久男氏、高橋千代子氏、細川忠一氏、堀昌逸氏）、聞き手：川原健太郎。

## (2) あいちグループの概史

次に、あいちグループの概史を取り上げつつ、現窓口を務める堀昌逸氏の語りを引きながらあいちグループの一側面をとらえたい。現窓口の堀氏は〈あいちふだんぎ〉8号（1983年5月）から参加、10号（1984年5月）から編集に関わっている。その後6号（1982年6月）から55号（2006年11月）まで窓口をつとめたあいちグループの現在の基盤を形作ったキーパーソンの一人である林常重氏とともに、編集等の運営に関わり、56号（2007年6月）から現在まで窓口を担当している。

ここでは〈あいちふだんぎ〉の創刊の頃を機関誌の記述から追いたい。創刊当時のことは、グループの創刊者の一人であった加藤幸穂氏が〈あいちふだんぎ〉9号（1983年5月）に綴っている。そこでは『愛知支部誌を発行しましょう』当時、数名に満たぬ愛知の同人の中の三名が、（……）怖いもの知らずで全く無からの出発<sup>34</sup>と、馴れないガリ版を彫り手作りでの本造り（52ページ）であった1980年2月の創刊時を振り返っている。手作りの冊子であり、小規模の出発で

あった。その後、活字印刷化され徐々に活動が広がっていく。「蟹の横パイだったあいちに、宮崎さんの自分史あいち第一号（1982年宮崎信『日々の足あとから』：引用者）が発刊され、すかさず林常重さんが『活』を入れた。マスコミに乗じて一気にメンバーが増大<sup>35</sup>したことも言及する。その後、文友の数が増え、〈あいちふだんぎ〉40号（1996年6月）ではあいちグループで投稿者が最大の114名となっている。こうした記述からも、長期に窓口をつとめた前窓口の林常重氏がキーパーソンの一人となっていることが確認できる。

林常重氏と現在の窓口である堀氏は編集など長期に亘り本の発行に関わってきた。そうしたことから、堀氏へのインタビューにより、運営・編集側の文友の側面からあいちグループをみていきたい。堀氏が「ふだん記」を知ったのは1982年11月、中日新聞に紹介された記事が契機であった（日付のメモを取っていないと堀氏）。当時三十代半ばの会社員であった堀氏が「ふだん記」の新聞記事を読み林氏宛にハガキを送ったことから関わりが始まる。「小説を書いたり詩を書いたり、そういう文芸誌かなと思って行ったら『ふだん記』はまた違うんですよね。庶民の文章ということで。ちょっと違ってただけで、それはそれなりにすごい面白い活動だと興味を持って。（……）否定的じゃなくてこれはものすごい面白い活動してるんだっていう。文芸を追っかけるグループとは全然違うなって、それは面白いと思ったんですね<sup>36</sup>。元々本が好きであったという堀氏は、予想していた作品を作るような文芸誌とはまた違っていったものの、「ふだん記」の本質である庶民の文章執筆である点に惹かれたことを語っている。さらに、堀氏は加入後すぐに10号（1984年5月）から〈あいちふだんぎ〉の編集に関わるようになっていく。

堀氏はさらにこう述べる。「私の『ふだん記』に関して（……）多少違う点は、若くして入りましたので、いつも作る側だったんです。自分の好きな文章書いて気の合った仲間とハガキ交流するというよりも、作る側に回ってずっとやっていました<sup>37</sup>」。「ふだん記」の文通などの側面を楽しみにしつつも、30代という「ふだん記」に参加する年齢が若い時期だったこともあり、本の執筆者の側面だけでなく制作への関わりから「ふだん記」への関わりを深めていったという。なお、堀氏が本のづくり手として「ふだん記」に関わるきっかけとなった林常重氏は、新聞へのあいちグループの紹介や文章講座など、あいちグループの活動を広げてきたあいちグループの鍵となる人物であったようだ。〈あいちふだんぎ〉59号（2008年11月）に追悼特集号が組まれるが、あいちグループは元より全国の各地グループから追悼文が寄せられ、その影響の大きさを伺い知る事ができる。

堀氏が林氏から窓口を交代し担当することに関しては、2008年の林氏逝去まで28年という年月で林氏と「ふだん記」に関わってきたことも含みつつ、堀氏は「幸いなことに（……）、全く私は同じ考え方だったんです。『ふだん記』に対してなど色々な意味で。だから、人間関係がうまくいっていたというのか、自然な流れでいわゆる2人でコンビしてやっているようなものだったんです。林さんは窓口ということで前面に出ますが、その下の本作りだとか会計は私がやっていて、非常にうまくいっていたんですね、お互いに。だからもう自然の流れでしたね<sup>38</sup>」と語る。こうしたあいちグループのあゆみを通して、創立メンバーから林常重氏から現窓口の堀氏へと窓口がつながりながら、地域に「ふだん記」の文章を発表する土壌を作ってきたグループであることが伺える。

### (3) 文友の語りからみたあいちグループ

次にあいちグループの文友の語りに着目しながら、あいちグループの果たした役割の側面をとらえたい。そのため、本説(1)で示したインタビュー調査4, 5の語りを(4)「ふだん記」参加の契機、(5)「ふだん記」から得たこと、(6)あいちグループに関することの3点に集約し、キーワードを抽出しながら、文友からみたあいちグループの側面をみていきたい。

表4 あいちグループの語りにみる「ふだん記」参加の契機

インタビューでの語り	キーワード	出典
(4)_1 「書いていたんですよ、自分ででも発表する場がなかったんですね。時々同窓会誌に出したりしていましたが、書いても発表する場所がなかったわけですよ(……) さっき言ったような勧誘を受けまして、こりゃぴったりだわということで入ったんです」。(新矢氏)	発表する場	調査5
(4)_2 「中日新聞に『ふだん記』の募集があった。私そのときにその新聞見とらんならそれで人生が変わったかもしれん。だから『ふだん記』見て難しいこといやと、ハガキの最初にこんにちはって書けばお付き合いできるといことだから、ということ考えたもんだね、これなら俺でもできるわということで入った」。(細川氏)	これならできる	調査5
(4)_3 「文章を書くのが嫌いではなかったのですが、多少何かに書いたりっていうね、自分で自己満足程度ですけど書いたりはしておりました。それでそのときに中日新聞で『ふだん記』のことが載ってまして、それに応募しました」(石川氏)	文章を書く	調査5
(4)_4 「家内工業を営んでいたものですから、私も家事の合間に仕事をしなければならず、趣味なんていうことに目を向ける余裕はなかったんです。(……) 仕事をやめたもんですから暇ができて、心の中も穴が開いたっていうような状態でして、これから何をしようかなんて思って少し日がたったんですけど、(……)『東海ふだん記』の新年会の模様が中日新聞に載ったんです(……) 私は小さい頃から読むことがとても好きだったもんですから、こういう会に入れば心の隙間も埋められるかなんていう感じがすぐ入会の申し込みをしまして」(高橋氏)	読むこと 何をしようか	調査5
(4)_5 「親と子どものことばかりやっていたので、ここで何か一つやらないと自分がなくなっちゃうような気がして、(……) 先生が上手にいろいろ教えてくださいましたので、それで(……) 友達もできるし、そういうところに引かれて」(賀治氏)	何か一つ	調査5
(4)_6 「当時子育てが終わって(……) 就職したんですよ。それをずっと続けているうちに(……) 自分のために何かをしなきゃいけないっていう気持ちになりました(……) 書画を習いにいっていたんです。(……) その中の友達の一人が(……)『ふだん記』で名古屋に通うっておっしゃっていたもので、『ふだん記』ってどういうものなのかしらって興味を持ちまして、そしたらこういうふうでって本見せてくださって、文を書いてみようかなって」(加藤氏)	何かをしなきゃ	調査5

表4は、あいちグループの文友が「ふだん記」に参加した経緯をインタビューの語りから抽出したものである。6人の文友の語りには、「ふだん記」参加前に二つの態様をみることができる。第一には、文章を書くことが好きであること、第二は何かの活動をしたいとるものである。あいちグループは、前者タイプの文友には、書いた文章を発表することができる場として、後者のタイプの文友には、何かの実践の機会を得る場としての役割を担っていたことを伺うことができる。

「ふだん記」に参加する直接の契機に着目すると、例えば(4)\_1、(4)\_6では友人の紹介を受け、(4)\_2、(4)\_3、(4)\_4では新聞記事であったことが語られている。口コミ等の紹介以外

に、新聞記事が参加のきっかけとなった文友が少なくないのがあいちグループの特長であると思われる。1984年11月に出された〈あいちふだんぎ〉11号では、「ふだん記」に参加した新人が特に多く、こうした状況を受け新人特集号と銘を打ちった形で編集されており、31篇の新人の文章が掲載され、加えて新人からの多くの自己紹介コメント「はじめまして」の項が掲載されている。こうした新人特集を組む〈あいちふだんぎ〉誌の11号（1984年11月）に対して、橋本義夫は「すごい『新人』の量、たまげました。『はじめまして』これはいい試みです<sup>39</sup>」という記事をつづり、多くの新人の参加や自己紹介の特集に前向きなコメントを寄せている。創始者の橋本義夫は存命中、各地グループに対して巻頭言をはじめとして様々な文章を寄せているが、各地グループの機関誌にもこうして励ましながら活動を支えていた姿をうかがうことができる。

なお、上記表4中に取り上げたうち2名の文友が11号の新人特集に執筆をしており、例えば(4)\_3石川氏は「年月」という化粧を意識しなくなった自らの経験を、(4)\_4賀治氏は「バイエルの練習」の題で新たにオルガンを練習するようになった日常を綴り、自己紹介のコメントを寄せている<sup>40</sup>。現窓口の堀氏においても、「ふだん記」参加の契機に新聞記事があったことを語っている。あいちグループではこのような新聞記事で知ったことを語る文友をみることができる。なお、(4)\_2を語る細川氏は1991年3月頃の中日新聞で「ふだん記」を知った文友である。細川氏が〈あいちふだんぎ〉に初投稿をした24号（1991年6月）にはあいちグループ新人特集の項に46篇と多数の投稿が寄せられている。発表の場や活動の場を求めていた文友を受け止める場としてのあいちグループの姿が伺える。

表5 あいちグループの語りにもみる「ふだん記」から得たこと

インタビューでの語り	キーワード	出典
(5)_1 「やっぱり生きがいがありますね。最初に新聞に載ったときに感じましたもんね。自分の文章がこの何百万人って人が見ているんだということを思うだけで」(新矢氏)	生きがい	調査5
(5)_2 「『ふだん記』で楽しんでいるうちに高年大学で勉強する楽しむ学校ができ、そのときも『ふだん記』の仲間に(紹介され)、(……)、ほんなら入れるなと思って申し込んだ」(細川氏) (5)_3 「『ふだん記』に入ってよかったのはね、『ふだん記』のことで字が上手下手はさておいて、書くことができるんですね。」(細川氏)	勉強する楽しむ学校の紹介 書くことができる	調査5
(5)_4 「みんなすごく優しくして親切だし、例えばこちらの痛みが分かってくれるような気がします。」(石川氏)	痛みがわかる	調査5
(5)_5 「家内工業を営んでいたときは、うちから出るのは本当に買い物に行くぐらいで子どもの学校行っているときは学校へ行くか、そのぐらいしか出なかったのが、『ふだん記』に入ってから外へ出ることが多くなりました」(高橋氏)	外へ出る	調査5
(5)_6 「同年代の人だと大抵そういう、きょうだいが戦死されたとか親が戦死したとかそういう話が多いんですね。そういうのを聞くと、まだ私は親も戦争くぐりながら全部まだ一緒に暮らせるようになったんですけど、幸せだったなと思って」(賀治氏)	戦争体験	調査5
(5)_7 「文を書くことによって、全国に文友さんができますし、読ませていただくし、そうすると会ってみたいくなるんですね。この人はどんな人だろうかとか、文を通して相手を想像しちゃうんですよ自分が、そうすると会ってみたいくなる。そうすると各地で集いがあるんですね、交流会が。(……) 不思議な魅力なんですけど、皆さんもそういう気持ちで迎えてくださるんですよ。これは『ふだん記』以外にはないと思う。こういうつながりはないと思います。」(加藤氏)	文友さん	調査5

「ふだん記」参加後に「ふだん記」から得たことに関する語りを見ると、書いたものを発表する場や何らかの活動の場以外としてのグループの姿が浮かび上がる。書く実践であるため、(5)\_1や(5)\_3のような書き、発表する場としての「ふだん記」以外にも、他の文友に関する言及が目立つ。例えば、(5)\_2の語りでは文友から紹介を受け高年大学において学ぶようになったこと、(5)\_4では自らの痛みをわかってもらえる存在としての文友という語りを見ることができた。

書かれた文章を通じた他者への意識がみえるのは(5)\_6である。80代前半で自らも戦争の苦勞を体験していながらも、同年代の他者の戦争体験の辛さを読みながら自らの生を前向きに捉えるようにする考えが語られている。他にも、(5)\_7は、他者の文章を読むことやその文章を媒介に文通や出会いがあることを語ったものである。書き発表すること、「ふだん記」文化の重要な柱である、他者とのやり取りという文友の活動状況が浮かび上がる。

表6 あいちグループに関する語り

インタビューでの語り	キーワード	出典
(6)_1 「橋本義夫先生の好きな言葉なんですけど、『その土地よかれ、その人よかれ』っていう言葉があるでしょう。全くその通り。私これは大好きですね。この言葉ね。」(加藤氏)	その土地よかれ	調査5
(6)_2 「その土地よかれって言葉があるでしょう。だからあいちがあいち、われわれはこの地元で文章活動をしているんですね(……)われわれはこの地に根差して、橋本先生の唱えた『ふだん記』運動をやっている。だからローカル、地域でやっていることが大事なかな。自分がたまたまこの地方にいるからここでやっているってことだけですね、結果的に言えば」(堀氏)	ローカル、地域でやる	調査4

さらに、あいちの地であいちグループが活動する思いに関わる語りを取り上げる。(6)\_1は橋本義夫の言葉で好きな言葉を尋ねた時の語りである。(6)\_1では「その土地よかれ、その人よかれ」が挙げられた。様々な地方で生きる人々それぞれを重んじる言葉である。この言葉に関する語りは、窓口の堀氏へのインタビューでも聴くことができた。「ふだん記」の柱の一つであろう、それぞれの地方を重んじる理念への意識があることは推察できる。しかしながら、(4)\_2で「難しい」と回答されているように、あいちの地で活動することへの特別な意識があるかどうかについては確認することができなかった。一方で、〈あいちふだんぎ〉の35年・74号分に掲載されてきた多くの「ふだん記」の文章には地元の日常生活に関する記述が数多くみられる(干場治彦「名古屋御園座かいわい」(12号、1985年5月)、干場治彦「ああ 名古屋驛」(14号、1986年5月)他)。これらから推察するのは、地元を特別な形で意識するのではなく、書き手が自らの暮らす生活の様子やそこでの考えを綴ることにより、結果的に自らの暮らす地方の文化を映し出す形となっているように思われる。

なお、「ふだん記」各地グループの中における、あいちグループの特長に関しては、あいちグループ文友の記述する「ふだん記」からも伺える。それが、思いを受け継ぐという点である。長期に渡り窓口を務め、あいちグループの礎を作った林常重氏、さらにはその後現在の窓口である堀氏やあいちの文友へと思いを繋いできたグループのあり方がさまざまな箇所から伺い知ること

ができるのである。例えば、(6)\_1を語ったあいちグループの編集委員の一人である加藤慶子氏は、2009年6月の60号誌にて、「先輩ふだんぎ一世と言われる方たちの存在は大きく、継続と力には敬意を表しています。時間は休まず追いかけて来ますが、樗を絶やさず次に繋いでいくことが、先人たちの恩返しとなり、私達の使命でしょう<sup>41</sup>」と綴っている。「樗を絶やさず次に繋いでいく」と書かれているように、ここでもみえるのはグループを繋ぎながら形作られてきたあいちグループのあり方である。

#### 4. 各地グループの意義

これまで、「ふだん記」北九州グループおよびあいちグループの実践を論じてきた。ここでは、本稿でとりあげた「ふだん記」各地グループの意義を論じたい。

第一に本稿で取り上げた各地グループの特徴は何らかの活動をしたいという文友の想いを文章に書く形で受け止めた場であった点である。文友たちは「ふだん記」を紹介する本との出会い、友人・知人からの紹介、新聞記事の紹介などさまざまな理由で活動に参加しているが、語りの中では文章の発表の場がほしい、何らかの活動をしたいなどの想いが伺えた。

第二であるが、文友たちは「ふだん記」を文章の書く場であるにとらえると同時に文章を読み・知り合う場にとらえていたことである。文友が「ふだん記」から得たことに関する語りを取り上げたが、文章を書く以外にも友人関係を得ることや他の人の文章を読むことに関する言及が少なからずみられた。文友たちは自らの文章を書くと同時に、それぞれが綴った文章を媒介にしながら他の文友の人生を知り、文友同士の交友関係を広げる役割として活用していた。

第三は「ふだん記」で書かれた文章が、それぞれの土地で生きた人々の自分史となっている点である。この点に関わり興味深いのは、今回の調査における文章の書き手は必ずしも地元を特別に意識していないようにみえたが、普段の自らの思いや生活を文章に書くことで、結果的にそこに暮らす人々の地域の文化を残すことにつながったことを見出せた。

なお、1980年代における書く実践には、他にも鈴木政子による自分史の実践がある。鈴木政子は1980年に『あの日夕焼け』（立風書房）を出し、自身と家族の戦争体験を綴る自分史を出す。鈴木は「わが子に書きのこすだけでいいはずだった体験記を、欲張って、みなさんにも読んでいただくことにしました<sup>42</sup>」と自分史を出版した理由を綴っている。自分史を残し、かつ他者に読まれることを意識していることが伺える。鈴木はまた、鈴木政子『自分史—それぞれの書き方とまとめ方』（日本エディタースクール出版部、1986年）において、さまざまな人々の自分史を紹介しつつ、その書き方をまとめている。

書き手は自らのことを文章に書きたいと思い、書かれた文章は他者に読まれることで共感が広がっていることである。多くの書く実践が1980年代においても展開されてきたことが予想され、これらを明らかにしていくこともまた、重要な課題と思われる。

1980年代に創始された「ふだん記」の各地グループは、八王子で始まった「ふだん記」に共鳴し、それぞれの地で人々を受け入れながら書く実践を継続してきた。本稿で論じた各地グループは、1960年代後半に創始された「ふだん記」の理念に共鳴しながら、1980年代以降において、それぞれの地で人々の生を綴る場の一つとなってきた意義があると思われる。

## まとめ

本研究では「ふだん記」北九州グループとあいちグループを対象に、実践を描出しつつ、意義を明らかにすることを目的とした。1. においては先行研究及び、各地グループの概要を論じた。2. では北九州グループ、3. ではあいちグループを取り上げ、1980年代に創設された二つのグループの実態を追った。最後に4. では、本稿で取り上げた各地グループの意義を論じた。

戦後の書く実践の歩みにおいて、生活記録運動は1950年代に盛んになった運動であったが、以降も人々の書く実践は続けられてきた。特に、本研究で取り上げた「ふだん記」各地グループは、1960年代に八王子で創始された「ふだん記」の理念に共鳴し、1980年代以降から現在に至るまで、それぞれの地元で人々の生を綴る場の一つとなってきたという意義が見いだせた。

しかしながら、本研究においては、今回取り上げた北九州グループとあいちグループ機関誌の文章の分析、他の各地グループの比較、同時代の他の書く実践との比較など課題も多い。各地グループへの調査は現在も継続中である。今後の課題としたい。

## 注

- 1 北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動 東北農村の青年・女性たち』岩波書店、2014年など。
- 2 ここで挙げた政府レベルでの取り組みの他にも、井口貢編著『入門 文化政策—地域の文化を創るといふこと』、ミネルヴァ書房、2008年などでは、比較的新しい取り組みとして、文化政策学に関する取り組みが示されており、京都・観光文化検定試験や、文化芸術創造都市づくりとしてのクリエイティブシティ・ヨコハマなどの事例が紹介されている。
- 3 辻智子「1950年代日本の社会的文化的状況と生活記録運動——生活記録運動の系譜に関する考察(2)」、〈神奈川大学心理・教育研究論集〉(29)、神奈川大学、2010年。猿山隆子「共同で紡ぎだす〈知〉—鶴見和子の生活記録運動にみられる不連続性をめぐって」、日本社会教育学会編『〈ローカルな知〉の可能性 もうひとつの生涯学習を求めて』日本の社会教育52、東洋館出版社、2008年など。
- 4 添田祥史「識字教育方法としての自分史学習に関する研究—ナラティブ・アプローチからのモデル構築の試み」、〈日本社会教育学会紀要〉44、日本社会教育学会、2008年。
- 5 例えば、前述の北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動 東北農村の青年・女性たち』では岩手、秋田、山形など東北において展開されていた生活記録運動を解き明かしている。
- 6 吉澤輝夫『「自分史文化論」の試み』、吉澤輝夫編『現代のエスプリ338 自分史』、至文堂、1995年。
- 7 小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー 『ふだんぎ』という空間の成立」、桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006年。色川大吉「ある常民の足跡」、色川大吉『ある昭和史 自分史の試み』中央公論社、1975年、増沢航『記録の戦後史—橋本義夫が残した記録』ふだん記創書24、ふだん記雲の碑グループ、2007年。土橋寿、橋本鋼二ら。
- 8 四宮さつき『十年—ふだん記と共に—』ふだん記本50、ふだん記全国グループ、1976年、p.77。
- 9 〈ふだん記 雲の碑〉38号、ふだん記雲の碑グループ、2016年6月、裏表紙。
- 10 橋本義夫『ふだん記の大道—その道標』ふだん記新書70、ふだん記全国グループ、1978年、p.72。
- 11 橋本義夫『ふだん記の大道—その道標』前掲、pp.72-73。
- 12 橋本義夫『誰もが書ける文章 「自分史」のすすめ』、講談社、1978年、p.168。
- 13 色川大吉『“元祖”が語る自分史のすべて』、河出書房、2014年、p.63。
- 14 ふだん記北九州グループへのインタビュー、聞き手：川原健太郎、2015年9月5日実施、於：朝

- 月堂（北九州市小倉）。なお、「ふだん記」はゆるやかなつながりのグループであることから、会員数は概数であることを付記したい。
- 15 川原洋子『「ふだんぎ北九州」十号までのあゆみ』、〈ふだんぎ北九州〉10号、ふだん記北九州グループ、1988年12月、pp.124-125。
  - 16 「おたより集」、〈ふだんぎ北九州〉37号、ふだん記北九州グループ、2015年8月、pp.95-109。他には、橋本義夫他ふだん記運動に関連する人物が執筆した文章の抜粋集や表紙の写真、絵の解説なども入っている。
  - 17 川原洋子氏は、川原洋子『筑紫の山脈・遠賀川』ふだん記新書253、ふだん記北九州グループ・全国グループ、1993年）を出し、自身の自分史と「ふだん記」との関わりを記している。
  - 18 川原洋子『「ふだんぎ北九州」十号までのあゆみ』、〈ふだんぎ北九州〉10号、ふだん記北九州グループ、1988年12月、p.124。
  - 19 川原洋子『筑紫の山脈・遠賀川』前掲、p.65。
  - 20 川原洋子氏へのインタビュー、聞き手：川原健太郎、2015年9月5日実施、於：川原洋子氏宅（北九州市小倉）。なお、ここで名前を挙げられた海端氏とは、長崎の島嶼在住の文友であり、「ふだん記」で色々な詩を発表する詩人でもある。
  - 21 川原洋子『筑紫の山脈・遠賀川』前掲、pp.65-74。記録は1978年9月28日まで残っていると川原氏は回顧している。
  - 22 川原洋子氏へのインタビュー、前掲。
  - 23 橋本義夫「下手に書いて、粗末に出す」、〈ふだんぎ〉創刊号、ふだんぎ北九州コロニー、1980年2月。会の規模が小さく始まっていたこともあり、創刊からしばらくは「ふだんぎ北九州コロニー」の名称でスタートし、徐々に北九州グループの名称になっている。
  - 24 川原洋子「三年たって」、〈ふだんぎ北九州〉創刊号、ふだんぎ北九州コロニー、1980年2月、p.17。
  - 25 倉田栄子「私とふだんぎ」、〈ふだんぎ北九州〉創刊号、前掲、pp.9-10。
  - 26 北九州グループ文友へのインタビュー、聞き手：川原健太郎、2015年9月5日実施、於：湖月堂本店（北九州市小倉）。
  - 27 牛島和子『「ふだん記」との出会い』、〈ふだんぎ北九州〉9号、ふだん記北九州グループ、1988年3月、p.13。
  - 28 牛島和子『「ふだん記」との出会い』、〈ふだんぎ北九州〉9号、前掲、p.13。
  - 29 志風忠義「できることは知れているけれど・・・」、〈ふだんぎ北九州〉9号、ふだんぎ北九州グループ、p.27。
  - 30 石橋英子「毎日心待ちに」、〈ふだんぎ北九州〉6号、ふだん記北九州グループ、1984年12月。
  - 31 ふだん記北九州グループへのインタビュー、聞き手：川原健太郎、2015年9月5日実施、於：湖月堂（北九州市小倉）。
  - 32 「〈ふだんぎ北九州〉著作リスト創刊号から第37号まで」、「橋本義夫の『ふだん記』各地グループにみる地方文化運動の一研究 報告書」（研究代表者川原健太郎）、2015年度早稲田大学特定課題研究報告書、2016年2月。
  - 33 〈あいちふだんぎ〉72号、ふだん記あいちグループ、2015年、p.116。発行部数は堀昌逸氏へのインタビューによる（聞き手川原健太郎、2015年12月4日、於：熱田図書館）。
  - 34 加藤幸穂「ふだん記の流れにのって」、〈あいちふだんぎ〉9号、ふだん記あいちグループ、1983年5月、p.5。
  - 35 加藤幸穂「ふだん記の流れにのって」、〈あいちふだんぎ〉9号、ふだん記あいちグループ、1983年5月、p.6。なお、宮崎信氏はふだん記あいちグループの創立者の一人、著書に宮崎信『日々の

足あとから』ふだん記新書105、ふだん記全国グループ、1982年。「マスコミ」の記述であるが、あいちグループは新聞で取り上げられることも多く、その影響で会員が増えている。例えば、〈あいちふだんぎ〉(8号、1983年5月、pp.131-132)では「“自分史”を刻む『ふだん記』運動」(記事掲載日や掲載誌等の記載はないが、本誌の記述より1982年10月7日中日新聞と推察できる)の記事が掲載されており、反響の大きさが記されている。

- 36 堀昌逸氏へのインタビュー、聞き手：川原健太郎、2015年12月4日実施、於：堀昌逸氏宅（岐阜県羽島郡笠松町）。
- 37 堀昌逸氏へのインタビュー、前掲。
- 38 堀昌逸氏へのインタビュー、前掲。
- 39 橋本義夫「おどろいた『あいち』十一号」、ふだんぎあいちグループ、1985年6月、p.4
- 40 石川多寿子「日常」、賀治美知子「バイエルの練習」、〈あいちふだんぎ〉11号、1984年11月。
- 41 加藤慶子「六十号記念特集『私とふだんぎ』」、〈あいちふだんぎ〉60号、2009年6月、p.33。
- 42 鈴木政子『あの日夕焼け』、立風書房、1980年、p.167。なお、鈴木氏は北九州市の自分史文学賞第18回（2007年）に「わたしの赤ちゃん」で大賞を受賞している。

※本研究は、JSPS 科研費（基盤研究（C）課題番号16K04572）の助成による研究成果の一部である。本稿執筆にあたっては、北九州グループ、あいちグループの文友をはじめ、多くの「ふだん記」文友の協力を頂いている。記して御礼申し上げたい。